

ネットワーク X とホール X の発見

藪根 一正

トーラスクラウド研究所

1. 緒言

A 氏はごく普通の成人男性であるが、通常は観察できない、透明な白色発光体の神経ニューロンのようなネットワークが張り巡らされているのが周囲に常時見えるという。さらにそのネットワークは、周りにいる人間やぬいぐるみといった無機物ともつながっているようであるという。

この一見不可思議な現象が、本当にあるのかどうかを客観的に確認するために調査を行ったところ、驚くべき事実がわかったので報告する。

2. 調査方法

A 氏の周囲の空間におきる現象を、3 名の人にルーペを使って目視してもらい、見えたものをスケッチしてもらった。

また、暗室で A 氏の指などにカメラの焦点を合わせてマクロ撮影し、空・天体などの屋外の風景も撮影した。使用機種はキャノン社製 EOS Kiss X6i (約 1800 万画素。以下、カメラ C)、ニコン社製 D800E (約 3630 万画素。以下、カメラ N)。

青色 LED ランプ照明下、赤外線照明下、無照明のそれぞれの暗室内での空間の様子を動画撮影し、屋外の風景も動画撮影した。使用機種は Sony 社製 ハンディカム HDR-CX 550V (動画画素数 約 415 万画素。以下、ビデオカメラ S)。

FLIR Systems Inc. 製サーモグラフィカメラ FLIR E40 (熱画像 19200 画素。以下、サーモカメラ F) を用いてサーモグラフィ撮影を行った。

3. 結果

① スケッチ

複数の人間が、同じような白色に輝くネットワーク状のものを目視している。その代表的なスケッチの様子を示す (図 1)。ネットワーク状のものが明瞭に見える人と、あまり見えない人がいるが、その原因ははっきりしない。

初版発行2013年4月4日 修正版発行4月17日

Email: yabune_kazumasa@toruscloud.com

〒540-0012 大阪市中央区谷町 1-3-11-503

トーラスクラウド研究所 ホームページ : <http://toruscloud.com/>

② ビデオ映像

暗室内で、照明なしでビデオカメラ S をまわすと、白色に輝く、明滅する小さな光の粒が、いたるところに見られる様子が録画される（図 2 暗室で撮影した動画のキャプチャ画像）。

暗室で青色 LED ランプを照らすと、普通は均質に青くなるはずが、青色光が陽炎のようにゆらぐ場所があり、この様子をビデオカメラ S で撮影した。暗室でビデオカメラ S を用いて赤外線照明下で撮影した時にも、赤外線が陽炎のようにゆらぐ現象が認められる。青色光、および赤外線が空中で屈折していると考えられる（図 3 青色 LED 照明下で撮影した動画のキャプチャ画像、図 4 赤外線照明下で撮影した動画のキャプチャ画像）。

③ 写真

照明の全くない暗室でカメラ C とカメラ N を用いて、指などを撮影し、データをアドビ社 Photoshop CS6 で、露出を増やす加工をすると、白色に輝いているものがネットワーク状になっている様子が映し出された。A 氏の指は明室でも撮影し、Photoshop CS6 で露光量を+7.11 に増やし、ネオン光彩（サイズ：-24・明るさ：23・色：黒）のフィルターをかけると図 5、図 6 になった。（図 6 は図 5 の拡大写真）。A 氏の指の周囲の無数の小さな光の粒（以下、微粒子 P と呼ぶことにする）が、指にも広がっており指の部分で微粒子 P が密集している様子がうかがえる。

④ サーモグラフィ

サーモカメラ F で A 氏の指を撮影すると、温度が高くなっている顆粒状のものが、A 氏の指の周囲に点在している様子がうかがえる（図 7 A 氏の指のサーモグラフィ）。一般的な猫のサーモグラフィを Wikipedia から引用し、図 8 に示す。

⑤ ネットワーク X とホール X

①～④の撮影をした際に認めたネットワーク状のものを、以下ネットワーク X と呼ぶ事にする。①～④の撮影をした時に、空に特段の変化はなかったが、後日、空を撮影すると、青空や月にネットワーク X が写り込むようになった（図 9、図 10。図 10 は図 9 の拡大図）。さらに青空や指に黒丸（以下、ホール X と呼ぶことにする）が写るようになった（図 11、図 12 とも ホール X が写る空の写真。図 12 は図 11 の拡大図）。このホール X は数十秒単位で大きさが変わったり、動いたりしていることもわかった。指の周囲のホール X が移動している様子を、指・カメラ・背景を固定して撮影し、図 13、図 14 に示す。

4 考按

写真撮影された画像については、まず撮影されたものがカメラのノイズである可能性を考慮する必要があると考えた。製造元の異なる 2 社のカメラを利用して、撮影者

を変えて撮影したが、同じネットワーク X が写り込んだ。また、製造元の公式サイトから、それぞれのカメラで撮影された高解像度画像をダウンロードし、Photoshop CS6 で露出を増やす加工を試みたが、ネットワーク X は写っていなかった。また、インターネットからダウンロード可能な暗闇の高解像度画像を複数チェックしてみたが、やはり同じようにネットワーク X は写っていなかった。以上などから、カメラのノイズではないと判断した。

ところが、A 氏と直接会話した人の周囲で写真をとっても、程度の差はあるものの同じように、ネットワーク X が写りこむ事があることがわかった。さらに A 氏が将来深くかかわることになる商品が過去に撮影された写真にもネットワーク X が写り込んでいたことがわかった。

まるで A 氏がネットワーク X を介して三次元世界にインターフェイスしているようである。A 氏の世界に関わりあいのある他者にも同じ現象がおきるようになる場合が多数あるということは、A 氏の視界に入った人、A 氏と電話した人、A 氏が具体的に考えた人、そしてこの論文に興味を持たれて A 氏にこれから会う事になる人などにも、同じ現象が起きる可能性が高いと推定される。そうなってくると、A 氏の親宇宙が、周囲に新しい子宇宙を生み出しているような感覚も覚えざるを得ない。HUMAN BRAIN PROJECT を率いるヘンリー・マークラム博士¹⁾が提唱するような、脳が新しい宇宙を創造している様子なのかもしれない。

また A 氏の指の周囲の微粒子 P によって、A 氏の情報ネットワーク X に伝えられ、逆にネットワーク X から A 氏へ情報が伝えられ、このやりとりが高速に行われているように見える。その際、微粒子 P が指先で密度が濃くなっていることから、微粒子 P が凝結して A 氏が形成されるという一見信じがたいような可能性も考えられる。

そうすると、東洋医学で指摘される「気」は、本来不可視であるが、可視的物質に凝固し、万物を構成する要素になると言われることがあるが、この微粒子 P は「気」のことかもしれないし、未知の宇宙の構成要素 X なのかもしれない。ひょっとしたら、ダークマターと呼ばれるものも同じものかもしれない。実際、微粒子 P が形成する光のパターンは、約 2 兆個のダークマター粒子の宇宙初期における重力進化をシュミレーションしたスーパーコンピューター京の画像²⁾ともよく似ている気がする。

しかも画像を拡大していくと、微粒子 P は立体的に対数らせんを描いているようで、ネットワーク X は卵子の表面やリンパ球の表面 (図 15、図 16) やニューロンのネットワーク、さらには小惑星が通過したときの複数の夜空の写真³⁾などとも酷似しているように見える。このパターンのアルゴリズムを現在解析中であるが、フラーレンポリマーの伝導電子の状態に酷似している感がある。

また、観察に利用した室内には、発光源がみられないにもかかわらず、プラネタリウムのように小さな粒状の光が明滅する様子が観察され、ビデオカメラ S で撮影される。サーモカメラ F では、図 7 のように指の周りに温度の高くなっているところがやはり粒状に観察されるが、このような温度分布は一般的には考えにくい。普通は図 8 のようになり、粒状の高温部はみとめられない。これらの明滅する小さな粒状の光や、温度が高い粒は微粒子 P と思われるが、普通なら三次元空間では見えないはずである。リサ・ランドール博士の提唱する理論⁴⁾によれば、私達は高次元時空に浮かぶ三次元のブレーンと呼ばれる膜のようなものの上に住んでいる可能性がある。微粒子 P が高次元時空に存在していて、何らかの理由により、おそらくはワームホールを通して三次元空間で観察できるようになっている可能性を想定してもいいのではないだろうか。

そして、青色 LED ランプの光、赤外線が、揺らいでいる状況も動画撮影された。カメラのノイズの可能性も考えられたが、同じビデオカメラで同時に室外を撮影したとき、空の映像には揺らぎが認められなかったことから、カメラのノイズではないと考えられた。この光や赤外線が揺らいで観察される現象、つまり光や赤外線が空間中で屈折している現象をどう説明すればいいのだろうか。ワームホールやブラックホールが存在して、光や赤外線が曲げられているのだろうか。

さらに人間が高次元時空とネットワーク X を介して繋がっていて、人間の身体情報や思考情報などを絶えず高次元時空と交信している可能性もある。すると、現在は意識中枢がどこにあるのか医学的に全く解明されていないが、人間の意識中枢は脳ではなく高次元時空に存在し、ネットワーク X を介して体とコミュニケーションしているのかもしれない。

また、高次元時空からとも思われる微粒子 P の凝結と分散が目に見えない速度で行われていると仮定すると、一瞬一瞬の A 氏は異なる微粒子 P から作られている可能性がある。とすると、私達は時間を連続しているものと考えているが、一瞬一瞬が別々の三次元ブレーンになっていて、連続した時間は存在せず、ただ三次元ブレーンの間隔の積分値を時間と呼んでいるだけなのかもしれない。時間の枠内での生活を余儀無くされている私達にはブレーン間の移行を知覚できないのかもしれないが、今回は何らかの理由でブレーン間の隙間を偶然かいま見る事ができたのかもしれない。

ところで、ホール X の周囲の光は屈折しているように見える。ホール X はワームホールあるいはブラックホールと呼ばれるものかもしれない。

5 結論

現時点で断定できる事はあまりないが、少なくとも次の事は言えるのではないだろうか。

人間はネットワーク X と情報交換をしており、人間が意識している宇宙はネットワーク X でつながっている。このネットワーク X には微粒子 P が使われ、三次元空間に暮らす私たちには、普段は見る事ができないが、何らかの要因により可視化されることがある。

今後ネットワーク X やホール X を精査することで、異次元空間の存在の証明、人間の本質、場合によっては、人間がどこからきて、どこに行くのかというような哲学的な命題に対して科学的な答えを出せる日がくるかもしれない。

そして、このネットワーク X とホール X が突然人類の前に姿をあらわした事は、人知を超えた存在の意思を感じざるを得ない。将来、人類がネットワーク X とホール X をつかって、この三次元の世界によりよくインターフェイスし、幸せな日常を手にするようにという神の強い願いの表れなのかもしれない。



図1 スケッチ画像

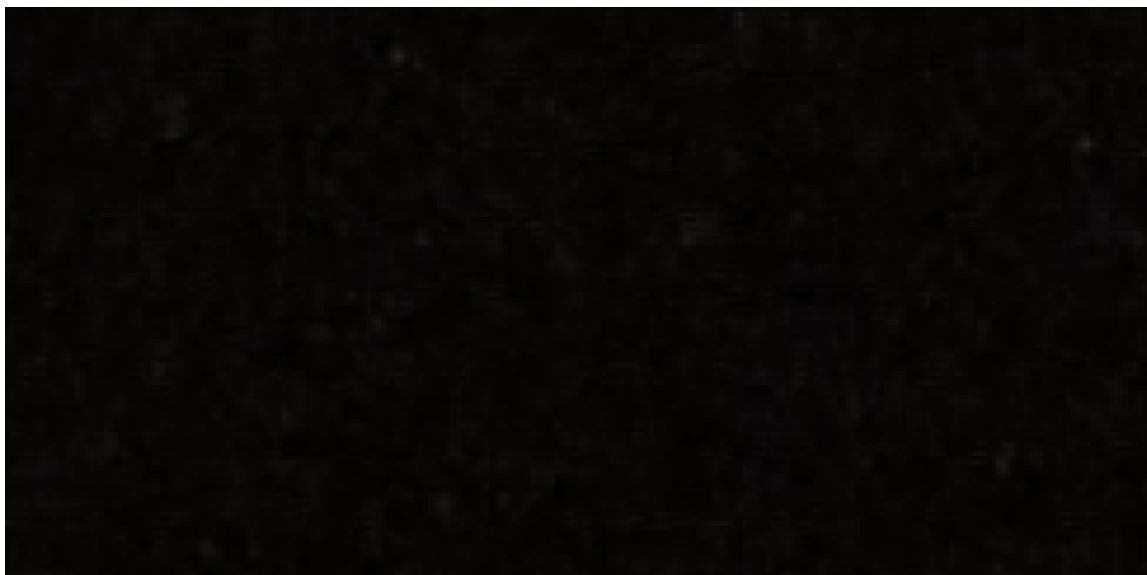


図2 動画のキャプチャ画像（暗室で撮影）



図3 動画のキャプチャ画像（青色LED照明下で撮影）



図4 動画のキャプチャ画像（赤外線照明下で撮影）

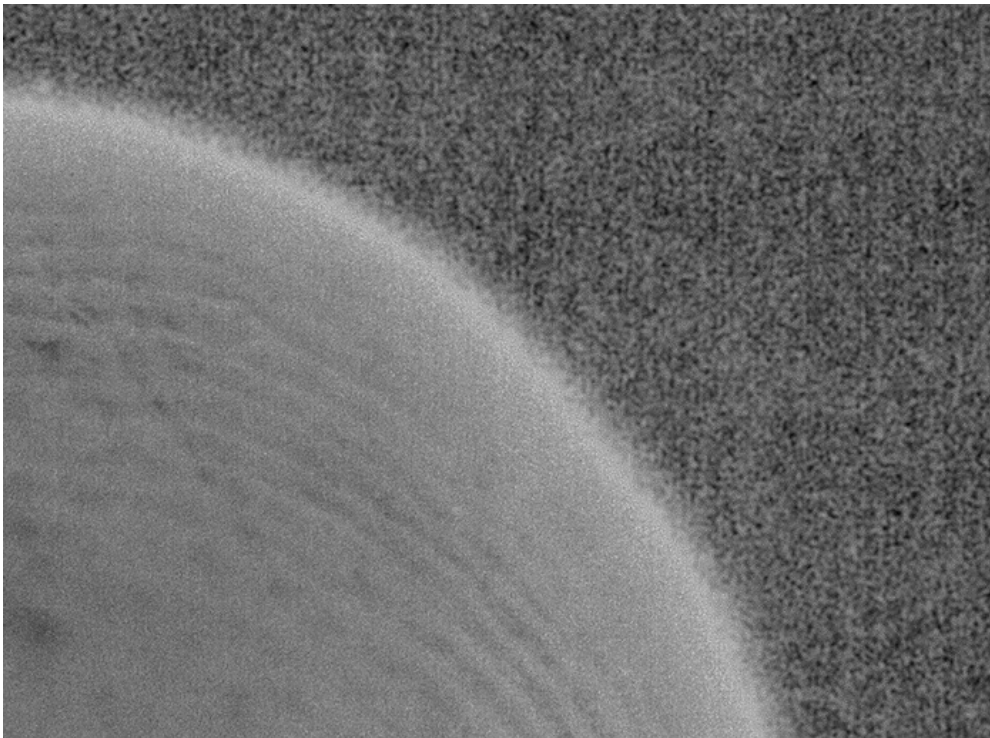


図5 A氏の指の写真

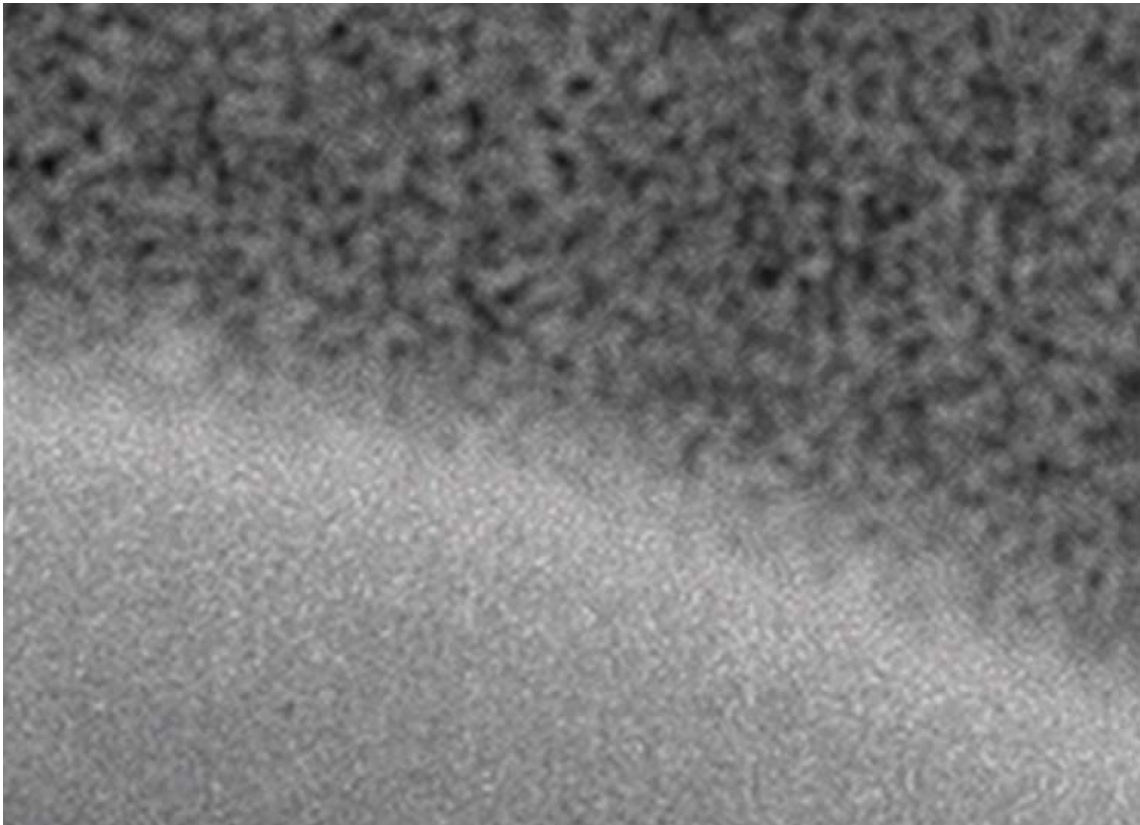


図6 図5の拡大写真

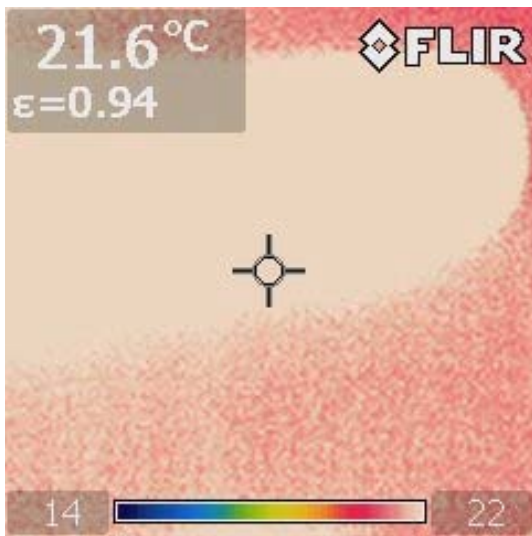


図7 A氏の指のサーモグラフィ



図8 猫のサーモグラフィ(Wikipedia より)



図9 月の写真



図10 図9の拡大図



図11 空の写真 (ホールXが写る)



図12 図11の拡大図



図13 指の写真 (ホールXが写る)



図14 図13からホールXが移動

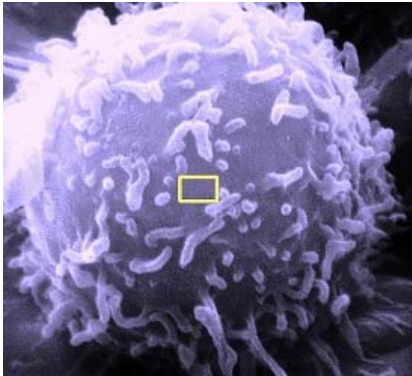


図 15 リンパ球の電顕写真
(Wikipedia より)



図 16 図 15 の拡大図
(Wikipedia より)

参考資料

1) HUMAN BRAIN PROJECT

<http://www.humanbrainproject.eu>

2) 筑波大, 理研, 東京工大, スーパーコンピューター「京」による世界最大規模のダークマターシミュレーションに成功, プレスリリース, 2012年11月9日

<http://www.ccs.tsukuba.ac.jp/CCS/pr/media/darkmatter121109>

3) MSN 産経ニュース, 「小惑星は無事通過 直径 45 メートル、史上最接近 地球に影響なし」, 2013.2.16 08:55

兵庫県の夜空の写真

<http://sankei.jp.msn.com/science/photos/130216/scn13021608570000-p7.htm>

鹿児島県の夜空の写真

<http://sankei.jp.msn.com/science/photos/130216/scn13021608570000-p2.htm>

4) リサ・ランドール, ワープする宇宙, 2007年